

ニュージーランドにおけるジュニア世代の“補欠をつくらない”スポーツシステムの紹介と提言

ニュージーランド・ワイカト大学 経営学部博士課程 西尾 建 氏

ニュージーランド政府は『Everyone. Every day. Enjoying and excelling through sport and recreation (すべてのニュージーランド人が、日々のレクリエーション活動を通じて、喜びや成長を見出すこと)』というスポーツニュージーランド(NZ)のビジョンのもと国民へのスポーツ促進を推し進めている¹⁾²⁾。ニュージーランドのスポーツを管轄しているスポーツNZの2011年調査³⁾によると15才から18才で年に1回以上スポーツゲーム(いわゆる試合)を経験した男子生徒は78.0%、女子生徒は77.2%となっている。ニュージーランドでは、ジュニア世代においてレベルに関係なく参加者みんながゲームを楽しむ機会が与えられる。つまり日本でいう補欠がないのである。ここではハミルトン市のジュニア・バスケットボール(おもに日本の小学生世代)と高校ラグビー(おもに日本の中学、高校世代)の補欠のないスポーツシステムの例を紹介し、日本における部活動中心の普及のあり方についてもあわせて考えていく。

ジュニア・バスケットボールの事例(5才から12才):通年での活動

ニュージーランド北島にある人口15万人のハミルトン市には約15のジュニアのバスケットボールクラブがある。クラブといっても自前のクラブハウスを持っているのではなく、学校の体育館を借りて父兄が中心になって運営している。ここではハミルトン市最大のFlyersバスケットボールクラブの活動を紹介します。Flyersでは5歳から12歳まで(NZの小学校1年生から6年生までと中学2年まで-日本の学年では年中から小学校6年生にあたる)の子どもたちが、バスケットボールを楽しんでいる。コーチ・マネージャーは、ほとんどが父兄のボランティアで運営しており、カテゴリーは2学年ごと4つに分かれている。活動期間は1学期(NZの学期は1月末から始まる4学期制)ごとになっており、練習時間は年齢カテゴリーごとに毎週月曜日の夕方、ワイカト大学の体育館を借りて行われる。

表1 Flyersクラブの練習及びリーグ戦での試合詳細 (2013年1学期のケース)

| 日本 | NZ | 学年 | 年齢 | 練習時間 | 試合(市内YMCA体育館2面) | | | | | |
|----------|-----|----|----|--------|-----------------|-------|-------|---------|-------|----------|
| | | | | (毎週月曜) | 試合日 | 試合時間 | 参加チーム | 内Flyers | 1日試合数 | 時間帯 |
| 年中 年長 | 小学校 | 1 | 5 | 40分 | 毎週木曜日 | 6分×4 | 9 | 1 | 4 | 4-5pm |
| | | 2 | 6 | | | | | | | |
| 小1 小2 | | 3 | 7 | 40分 | 毎週水曜日 | 6分×4 | 10 | 1 | 5 | 4-5:30pm |
| | | 4 | 8 | | | | | | | |
| 小3 小4 | | 5 | 9 | 50分 | 毎週金曜日 | 6分×4 | 16 | 2 | 8 | 4-6pm |
| | | 6 | 10 | | | | | | | |
| 小5 小6 | 中学校 | 7 | 11 | 1時間 | 毎週火曜日 | 10分×4 | 22 | 5 | 11 | 4-8:30pm |
| | | 8 | 12 | | | | | | | |

※参加チーム数は毎学期変動

『登録した子ども全員が毎週ゲームを楽しめる』

ゲームは活動期間中、登録されているクラブの子ども全員が毎週試合を楽しめるようなシステムになっている。ハミルトン市内の各クラブは学期の初めにチームをスポーツワイク⁴⁾（ハミルトン市のスポーツ局）に登録する。試合は、登録全クラブが市内中心部にあるYMCAの体育館2面を使用し、午後4時から行われる。全クラブが集まるとしても試合15分前に集合して、試合時間が終わるとすぐに解散するので拘束時間は1時間あまり。曜日ごとにカテゴリーを決めてゲームが実施される。審判は地元の高校生、得点盤係と記録係は各チームの父兄がひとりずつ手伝う。あらかじめ自動的に時計がセットされており、時間が来たらベルが鳴り試合開始である。クォーターごとにもベルが鳴り各チームがベルにあわせて動き、実に効率よく試合を進めていくため各カテゴリーとも1日で多くのゲームをこなすことができる。このシステムにより、子どもたちは活動期間中毎週ゲームを楽しむことができるのである。



写真 放課後市内中心部YMCAの2面のコートをフルに使って
ゲームが毎週行われ登録者全員がプレーする

学期が終わるとチームは一度解散し、新しい学期に入ると再度登録する。この柔軟なシステムがあるおかげで子どもたちは全員がゲームを楽しみ、出入りも自由で他のスポーツとのかけもちも可能になるのである。さらにトップレベルを目指す子どもたちは、このリーグ戦に加えて地域代表のセレクションが行われ、選ばれた選手は別にトレーニングを積んで他の地域代表との大会に参加する。バスケットボールを楽しむ子どもたちには平等に機会が与えられ（草の根レベル）、さらに高いレベルを目指す子どもたち（トップレベル）にはさらにその機会が与えられているのである。

高校・ラグビーの事例(13才から17才):シーズン制

ニュージーランドの高校においても同様に補欠のないシステムで運営されている。ハミルトンには、ワールド・ラグビー・ユース大会で2010年11年と2年連続で世界一に輝いたハミルトンボーイズ高校(HBHS)がある。約2000名の生徒を有するハミルトンボーイズ高校の場合なんと16のラグビーチームが登録されている(2012年シーズン)。



写真 高校ラグビー世界一にも輝いたことのあるHBHSには16のラグビーチームがあり学生はそれぞれのレベルで毎週ゲームを楽しんでいる

サモアやフィジーなどから留学生が来るプロ予備軍ともいえるトップチームから初心者中心の草の根ラグビーまで、ジュニアバスケットのシステム同様、そのシーズンにプレーをしたい学生の数によってチームが編成されるのである。また日本の部活動のように高校の教員がコーチをするというのではなく、おもに父兄がコーチやマネージャーとして別々に練習し活動しており、参加者の競技レベルや目的にあわせて全員が試合を楽しむことができるのである。

表2 ハミルトン地域高校ラグビーリーグ一覧(2012年のケース)

| | リーグ名 | 参加チーム | チームあたり 試合数 | HBHSチーム数 |
|---------|------------|-------|---------------|----------|
| 広域リーグ | Super 8 -1 | 8 | 7 | 1 |
| | Super 8 -2 | 8 | 7 | 1 |
| | 計 | 16 | | 2 |
| ハミルトン地域 | 1 | 6 | 10 | 0 |
| | 2 | 6 | 10 | 1 |
| | 3 | 8 | 9 | 1 |
| | U16 | 8 | 10 | 2 |
| | U15 | 10 | 9 | 2 |
| | U14 | 10 | 9 | 1 |
| | U65kg | 5 | 8 | 3 |
| | U55kg | 12 | 11 | 4 |
| | 女子 | 8 | 7 | 0 |
| | 計 | 73 | | 14 |

※HBHS：ハミルトンボーイズ高校

※※広域リーグ参加8校、ハミルトン地域参加25校

『シーズン中は参加者が全員毎週ゲームを楽しむ』

表2は総当たり戦がおこなわれているリーグ戦の一覧である。トップレベルは広域レベルの8つの強豪高校で構成されているスーパー8が2リーグある。一方ハミルトン地域の高校では上位3リーグ、年齢別3リーグ、体格差を考慮した体重別2リーグと女子1リーグの計9リーグから形成されている。HBHSではトップ2チームは広域リーグに、残りの14チームはハミルトン地区でそれぞれのカテゴリーに入ってラグビーを楽しんでいる。登録された学生全員が実質活動期間5月から8月の3ヶ月間(2週間の冬休みをはさむ)ほぼ毎週ラグビーのゲームの機会を持つのである。2012年ハミルトン地域では25校73チームが登録されており、各校そのシーズンの希望者に応じて複数のチームが活動している。なお全員がゲームに参加できることに加えて、トップレベルはレギュラーシーズンのゲーム(表2)に加え各年代との州代表が組まれており、年代別全国規模の大会も実施されている。バレーボール、ネットボールなど他の高校チームスポーツにおいても同様に、補欠のない全員ゲームを楽しめるシステムになっている。ニュージーランドにおいては、ほとんどのチームスポーツで全員に週1回ペースでのゲーム参加がしっかり担保されているのである。

日本でも1校1チームを撤廃して参加者みんながゲームを楽しめるシステムの導入へ

日本でのジュニア、中高校生世代のスポーツ活動はどうだろうか？小学生の野球やバスケットボールなどのスポーツでは、クラブや学校で複数チームが登録されるケースはあるが、基本的には1クラブもしくは1つの学校につき1チームという登録になっており、ゲームも公式戦においてはトーナメント形式が多い。全国大会に出場するような強豪チームのレギュラーは多くの試合機会が与えられるが、1回戦で敗退するチームは、公式戦はわずか1ゲームで終わってしまう。さらに試合メンバーに登録されない補欠も多く存在し、その競技者たちはゲームに出場することすらできない。

ここでは平成24年度の中体連⁵⁾ および、高体連⁶⁾ のデータをもとに、ひとつの学校で1チームしか登録できないということを前提に、ラフではあるが公式戦に出場できない部員の比率を算出してみた。たとえば中学男子バスケットボールでの登録学校数は7196校で177201人が登録されているが、1試合で10人の登録とした場合、実際には40.6%の71960人しか公式戦には出場できない。つまり残りの59.4%が補欠ということになる。中学女子(49.3%)、高校男子(49.6%)、高校女子(34.2%)においても多くの補欠がいる。またバレーボールやハンドボールなどの他の団体スポーツのデータ⁵⁾⁶⁾ で見ても多くの補欠がいて、練習はやってもゲームの楽しみを十分に味わうことなく、多くの学生がスポーツから離れていってしまうのが現状である。

2011年に制定されたスポーツ基本法⁷⁾ の前文には『スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保されなければならない』と書かれているが、日本では競技者として登録はされていても、多くの子どもや学生がゲーム(公式戦)を楽しむ機会を与えられていないというのが現状である。1校1チームの弊害も考えないといけない。たとえば強豪校へ入学した学生の中にも、そのスポーツをやるのはじめてで楽しみたい人がいるだろうし、上下関係がわずらわしいという学生や監督のやり方にあわず、スポーツそのものへの参加をあきらめるケースもあるだろう。

ニュージーランドでは、教員というよりも、父兄やコミュニティにいる経験者らがコーチをすることが多く、スポーツ指導にコミットしているコーチは、練習の日は職場を早めに切り上げるなどコミュニティスポーツに対する職場の理解など環境の違いも大きい。今後もし日本でも補欠をなくし試合数が増えれば、コーチ、審判や試合会場などさまざまな問題はでてくるだろう。しかしながらスポーツ基本法の『すべての人がスポーツを楽しむ権利』という理念からも、ニュージーランドのように『参加者全員がゲームに参加して平等にスポーツを楽しむ』ことができるように、日本の部活動において1校1チームを撤廃して、補欠をなくしていくという議論をする必要があるのではないだろうか。

著者

西尾 建 氏

ワイカト大学経営学部博士課程

米系金融機関に15年間勤務。ラフバラ大学スポーツ&レジャーマネジメント学科修士課程修了。主な論文は『Analysing the Economic Impact of the Olympics Using Stock Market Indices on Host Countries』『The Impact of Sports Events on Inbound Tourism in New Zealand』『海外スポーツイベントにおけるアウトバウンド・ツーリストの研究』『ニュージーランドのジュニアラグビーについて』など。スポーツ基本法制定のための文部科学省スポーツ政策調査(ニュージーランド)にも参加。

引用

- 1) Sport NZ
- 2) 笹川スポーツ財団 2011年 諸外国のスポーツ振興施策の状況(ニュージーランド)
- 3) 2012年 SPORT AND RECREATION IN THE LIVES OF YOUNG NEW ZEALANDERS Sport New Zealand
- 4) Sports Waikato
- 5) 公益法人 日本中学校体育連盟 平成24年度 部活動調査集計 学校数・加盟校数
- 6) 公益法人 全国高等学校体育連盟 平成24年度 加盟登録状況
- 7) スポーツ基本法